

北区民まちづくり会議 摘録(平成27年12月1日(火) 午後6時30分～8時)

【開会】

○事務局

会議を公開（発言要旨を北区役所ホームページに掲載）することを説明

【区長挨拶】

師走のお忙しい中、お集まりいただき、御礼申し上げます。

去る9月13日の北区制60周年記念式典・交流会には、委員の皆様にも多数御参加をいただき、改めてお礼申し上げます。その他の北区制60周年記念事業についても、まちづくり会議委員の皆様をはじめとする多くの区民の皆様の御尽力により、60周年の節目にふさわしいものとして実施することができた。改めて、北区の地域力を広く知らしめることになったと考える。

北区民まちづくり会議の委員の皆様には、昨年度から部会などを重ね、北区基本計画の今後5年間に優先して取組むべき重要な事柄について、熱心に議論を重ねていただいた。様々な御意見や御提案を頂戴したことに感謝している。

本日は、これまでに頂戴した御意見や御提案を参考に、事務局において「これから5年間のまちづくり」について検討し、これまで御議論いただいた中から、「つながる」ということをキーワードに「北区民つながるプログラム」としてとりまとめたので、御説明させていただく。委員の皆様から御意見を頂戴したいと考えているので、本日も積極的に御議論いただきたい。どうぞよろしくお願いする。

【議事】

○事務局

ここからは、座長の市川先生に議事進行をお願いしたい。

○市川座長

今日もよろしくお願いする。次第に従い、議事を進行する。まず、「北区基本計画－これから5年間のまちづくり－北区民つながるプログラム」の素案について、事務局から報告をお願いします。

○事務局

「北区基本計画－これから5年間のまちづくり－北区民つながるプログラム（案）」については、前回のまちづくり会議で、「今後の5年間のまちづくり」の御承認をもとに、今回は素案として取りまとめ御提示するものである。

<資料1に基づき説明>

○市川座長

ただいまの事務局からの説明について、部会を進めていただいた4人の部会長から補足・御意見などがありましたら、お願いします。

○谷口副座長

主に、大学・まちづくりについて議論を担当させていただいた。これまでの会議でも発言してきたことであるが、大学が4つあって、それぞれ専門的なゼミがあり関わりを持っている。4つの大学の学生のボリュームは非常にたくさんある。今日のプログラムとして出されているものは、いいコンセプトである。「知る」「触れる」「関わる」という流れで、学生にとってもわかりやすい。専門のゼミや部活ではなく、そのようなものに関係のないところでも、学生を地域にいかにして関わらせるかということが課題である。「『地域コミュニティ』とつながる」のところで、「知る」の14番目のプロジェクトとして「大学、学生と地域がお互いを知る」と書かれているが、これは意識しないとなかなかできないし、進まないと思う。具体的には、例えば大学入学時、転入時に情報共有をする内容として、学生向けの生活上の作法、ゴミの分別からはじまる暮らしにつながる情報から、地域の観光も含めて掲載した情報誌を作り、行政にオリエンテーションに出て話してもらうぐらいまで進めたほうがいいのか。下宿する学生や通学の学生もいるが、学生たちに、4年間北区で学んでよかったという経験にどうやって結びつけるか、具体的にイメージしていく必要があると思う。

○志藤副座長

中山間地と福祉という難しいテーマで、みなさんと活発に議論を重ねた。素案では「つながる」ということできれいにまとめていただいた。議論していく中で、2つ気づいたことがある。1つは、区民自身が展開できるプログラムを作る必要があるということである。自己展開的なプログラムをどのように作っていくか。もう1つは、福祉・中山間地の問題は密接な関わりがあるが、中山間地では、高齢者の問題は大きな位置を占めるし、まちでは、高齢者・子どもの問題がある。課題の置き方は地域の特性により変わってくる。深刻な生活上の問題にぶつかっておられる方の課題を、どうやって「みんなごと」として考えるか。そこを自己展開的なプログラムとして考えて中身をつめないとか具体化は難しい。今回は、プログラムを提案して住民が積極的に参加していく形を採っているので、福祉・中山間地に関わっている方の、情報発信・巻き込み力が問われていく。そういった意味で、まち・産業文化が基盤になる。福祉・中山間地を焦点化しながら進めていくということが北区基本計画を進めていくうえでも非常に重要な問題だと思う。

○島田副座長

まちの産業・文化とどうつながっていくかなどをテーマに議論をした。その内容と最新の情報を織り交ぜてお話しさせていただく。雑誌で京都特集が20冊くらい出る。出版社にとっては、秋の京都特集は、収益の上がるものである。その中で、最近の傾向として顕著なのは、北区に関わっておられる皆さんにとって嬉しいことではないかと思うのだが、「紫竹」

「紫野」を注目スポットとして女性雑誌4誌が取り上げている。前職が出版なので、なぜこのように取り上げられているか分かるが、毎年同じテーマで取り上げるわけにはいかないの、ホットスポット、注目すべきお店などについて京都のニュースを集めながら、京都在住のフリーランスの女性ライターが出版社に情報を送る。そんな中で複数のライターは「紫竹へ急げ」というような形で出したのだろう。「クレア」「家庭画報」「Hanako」などである。女性からみて「行ってみたい」というところが注目される。例えば、和菓子づくりや、かわいいアクセサリーをつくる女性職人が西陣の町家に住んでいて、読者と近い関係性にあり共感を得ると思われるようなところである。住み、仕事をしながら、まちの歴史・文化に触れる。「職住一体型」の住まいということが、東京の女性にとって珍しく、京都らしい。等身大の魅力につながっている。まさにここに書かれている「歴史文化に触れる」ということである。そういう人をどう取り込んでいくか。旅は、目的地に行くのではなく、人と触れ合うことである。そういうことが、京都に来る旅行者の琴線に触れることである。そのようなことがきっかけになって、京都に移住してくる人も増えてきている。このような背景があって、紫竹が注目エリアだということが出てくる。この傾向は、来年も続く。来年の春の特集、秋の特集でも続き、紫竹のお店やまちを紹介するものが出てくるだろう。発信されている情報を知り、受け入れ体制を「着地型」として整えることが良いと思う。交流する人が増え、北区の「第二区民」、住んではいないけど北区のファンになってくれる人が、例えば普段は東京近郊に住み、東京港区に通勤しているが、京都に来たら北区を訪れ、紫竹のお店の方と交流するような人が増えればベストかなと思う。

○宗本副座長

私が関わったのは、「環境」を中心にした部会である。環境と一言で言っても、まちのことや自然など色々ある中で、北区の自然を中心に議論した。基本計画の中では、自然を山や川に限っているように思えるが、田畑、北区の自然として扱っていくことで魅力的な資源として使っていけるという視点で、今回のプロジェクトでは、自然という定義を、「北山」「賀茂川」「木」「森」「田畑」という形で書いていただいた。指摘が漏れていたが、5ページ記載の「自然」にも「田畑」を入れていただいたほうがいい。また、ゴミの問題が議論に出てきた。オープンスペースの課題として、ゴミがなぜ捨てられるかということが話題になり、なぜゴミを捨てるのか、どうすればくいとめられるのかということについて意見が出た。ゴミ箱の配置を考えるだけでなく、ゴミの捨てられる場所を明示することで田畑にゴミを捨てなくなる。プログラムで示されていることは大きなことで、小さなことを積み重ねることできると思う。紫竹という言葉で観光エリアの話が出ていたが、観光につながる話として、京野菜を競う大会があるという話が出たが、私は知らなかった。出品されたものが即売されるということで、地元で知られていることだが、外には情報発信ができていない。環境という切り口でも、観光などにつながる話のできたので、本当は部会で出たことを共有できたらよかった。「知る」「触れる」「関わる」という段階の中で、具体的にどうやっていくのか今回の議論を振り返りながら、積極的に事業に取り組んでいただきたいと思う。

○市川座長

部会長の皆様、ありがとうございます。谷口先生、志藤先生は、ここにはきれいなことが書かれているがそれだけでは、足りないのではないかということをおっしゃっていたのだと思う。一步前に進む動きが、私たちにもいるし行政にもないと、せっかくいいプログラムを作ってもなかなか効果に結びつかないと伺った。志藤先生は「自己展開的な」という表現をお使いになったが、このプログラムを更に展開させるような仕組みがないともったないというお話ではなかったかと思う。

島田先生、宗本先生のお話には、具体的な話が出てきた。このプログラムを進めるために、「例えば」ということでお話をいただいた。紫竹の話が出て、北区のファンになっていただくということなど、おいしそうな話をしていただいた。宗本先生にも具体的なゴミのお話をいただき、ゴミ箱の配置だけでなくその表示により捨てられるゴミを減らせるということだった。

部会長4人は、「いいものができたが、どういう方向に、どう進めるかという知恵と行動が求められている」ということを話されていたと思う。この後、委員の皆さんには、事務局の説明、部会長の話を踏まえて、御意見や御質問を頂戴できればと思う。

○委員

非常にいいプログラムだと思っている。これを具体的にどうするかとなると、北区の人に「これをお願いします」といっても、やる人はやるが、やらない人はしない。もう少し下に下ろす、掘り下げるというという意味で、学区、もう一つ下げて、町内会で取り上げていかないと進まないかなと思う。今、町内会に入る人は少ないという課題があるが、学区・町内会で取り組むことで、町内会に入る方も増えるのではないかな。ファンになってもらうことができると思う。取り組むことのメリットを言ってもらって、町内会に入ってもらうために、学区の特徴を出しながら掘り下げていただきたいと思う。

○市川座長

何かやろうとすると、核になるのは「町内会」で、個人ではなく、町内会が動きやすいということか。学区民になると、号令をかけるのがなかなか大変ということかと思う。町内会ごとに声をかけて動くのがよいのか。

○委員

それができたら一番がいいが、町内会は会長が一年ごとに変えられるので、難しいところがある。ある程度、学区でまとめて、「みんなでやろう」という形で、一緒にやっていくのがいいと思う。学区・町内会の両方で動くことができれば。

○市川座長

基本は区民の側から声が上がって、自主的にまちづくりにつながればいいが、声が上がらない場合は、行政から「北区にはこんないい資源があるから使おうよ」と声をかけるとい

うことも考えた方がいい。基本は、区民の側から声を上げるのがよいが、それがないようなら何もしないのももったいないので、最後の手段として行政から何か具体的な提案があってもいい。

○事務局

前回のまちづくり会議で御提案させていただいたのは10ページまでで、内容としては18のプログラムの提案であった。委員がおっしゃったことだが、それぞれ地域でどうやって進めていくのかということについて、事務局として検討する中で、地域にいきなり「自分ごと」といっても難しい。11ページ以降の「プログラムを進めるために」は、色々と問題意識や課題をお持ちだが、どうしていいかわからないという団体や区民の方と一緒に進めていく事業として、書かせていただいているのが、前回の会議と異なる点である。12ページの「知る」を応援するということでは、例えば「地域コミュニティ加入促進」の事業は、地域の担い手が不足して困っているということから、行政と地域の方が一緒になって取り組むということを記載させていただいた。「応援プロジェクト」というのは、区が予算化して地域の皆さんと考えていきたいということである。学区のまちづくりビジョンということでは、以前市川先生が「柘野まちづくりビジョン」に関わっておられるが、同じように、地域の方に自分たちのまちをどのようにしていくかを考えていただけたらと思う。新たなまちづくりの担い手、シニア世代をどう取り込んでいくかを予算化した上で、地域の方々と一緒に考えていきたい。地域間相互の関わりはなかなかできなかったが、区制60周年を機に学区間のつながりができてきた。これを発展的に取り組んでいきたいということで、プログラムに書かせていただいている。

○市川座長

取組も考えておられるということで、安心した。意識して仕掛けを作ろうとされている。他の委員にも発言をお願いしたい。

○委員

先日、京都産業大学の50周年に感謝状をいただいた。地域と学生との関わりということでは、商店街のフェスティバルではだいたい300人程度に関わって貰っている。チアガール、吹奏楽、応援部、放送部には機材をお借りしてやっている。それが何年もずっと続いている。続くのは、部長が変わっても引き継がれているからである。商店街の「やおいちゃん」というキャラクターがいるが、落研がグループを作って、何か行事があるたびにやおいちゃんを借り出して、参加してくれる。組合のホームページもそのグループの卒業生がやってくれている。上賀茂神社付近の英語・中国語・韓国語のマップ作成も京都産大の学生が関わってくれている。学生がいないとできないという行事が多々あり、今回感謝状をもらったが、こちらから感謝しないといけない。

コミュニティサロンを運営しているが、家賃11万で、光熱費を入れると13万、14万円かかる。利用料を200円、300円取っているが、あとは商店街が負担している。商店街の

店舗は使わない。今、サロンを利用しているのは元気な高齢者である。人件費がないので、私が朝掃除している。参加者が責任を持って、使用料を集めて副理事長のところに持っていく。月に250人から300人が利用しているが、体操などは人気でパンク状態である。地域と高齢者、学生との関わりを持っていて、大学生が子どもに勉強を教えることもしている。小さな商店街だが、徐々に地域とのつながりができていると思う。

商店街の歩道が資源ゴミの集積場になっていて、歩行者の迷惑になる。去年、ゴミの告知板を作ったが、最近守れなくなったので、プランターを置いて、告知をそこに挿した。三段階にすると守る。きれいなものをゴミから守らないといけないという風になる。京都市はゴミの分別が細かくなったが、ゴミの収集の告知をもう少ししっかりきっちりすれば、守ると思う。収集後にゴミが落ちていたら、誰かが責任を持って、区役所のまちづくりの方にお知らせして、それを回収していただく。その日のゴミはその日のうちに片付けるときれいなまちになる。町内で順番にやれたらいいと思う。

○市川座長

町内会と商店街のことと両方だと大変だ。

○委員

地元に住んでいるので、しんどくないし負担には思わない。商店街のフェスティバルは1万人近い集客で、バスの通行を迂回してもらっている。紫竹学区を始め、町内会の回覧板で回してもらっている。お互い情報交換してやれればと思う。

○委員

11ページに「自分ごと、みんなごとのまちづくり情報」で具体的に書いていただいているが、常にあるものがあればいいなと思っている。「北区つながるワークショップ」に参加したいと思っているが、ほとんど参加できない。まちづくり活動などに熱心であればあるほど、予定が詰まっていて参加できないので、決まったイベントもいいが、もう少しゆるやかな、たとえば「TAMARIBA」で何曜日何時からまちづくりのことをお茶を飲みながらゆるく話しをする場所があり、そこにコーディネーターがいて話ができるとか、船岡温泉に入ってまちづくりのことを話しませんかということを持ち回りで企画して、それがわかるような仕組みがあれば、気軽に参加できる。そのような情報を、北区としてツイッターで発信すれば、若い人も参加できるのではないかな。私もできる限り行くことを考えたいと思う。

○事務局

「ショートムービー&フォトコンテスト」をツイッターで応募していただくことで広げると期待して実施しているが、動画は苦戦しているところである。情報発信は可能だが、情報を必要な人にどう届けるかということが難しい。コンテストを教訓として、さまざまな情報媒体を検討して、研究していきたい。

○委員

私も島田先生のお話でいうところの「第二区民」である。区外に住み、雲ヶ畑で森づくり活動している。12, 3年森づくり活動をしているが、5年前くらいから、西原まちづくりアドバイザーのようなコーディネーターが色々仕掛けをするようになったなと感じている。北区基本計画にそったプランだと思うが、われわれの活動やそれ以外の団体の雲ヶ畑での活動もバックアップしてもらっている。特に、「つながるワークショップ」に雲ヶ畑の人が参加され、その人に魅了された方が雲ヶ畑に行こうと企画され、雲ヶ畑での取組にも参加されるきっかけとなっている。魅力を感じた方は、何度も雲ヶ畑に行かれる。そのような活動の延長の一つとして、毎週「あべきた」に雲ヶ畑が連載されている。うちの団体についてはマンパワーの限界があるので、次の展開に我々の団体だけで行くのは難しく、盛り上がっているのに乗り切れなくて、じれったい思いである。そのような中で、委員が学区のお話をされたが、次の展開で雲ヶ畑全体を巻き込もうと思うと、「第二区民」の活動にはすぐには巻き込めないが、例えば自治振興会にお話をしてお話をして賛同して連携していただくと、住民にも安心して関わっていただける。住民以外でも北区を活動の場とする団体と、地域・自治会と連携の橋渡しなどをしていただければ、活動につながる。

○区長

来年度の取組を少し事務局が報告したが、「応援プロジェクト」については、行政、まちづくりアドバイザー、元小学校校長である子育てサポーターなどの行政的なメンバーの他に、民間的なコーディネーターの力を加えていきたいと考えている。「つながるワークショップ」については、今年は60周年ということで、多様な世代の方に参加いただいた。中学生参加の回については「中学生がまちについて考える機会になりよかった」と中学の校長からお話をいただいたので、そういったものについては続けていきたい。従来の「つながるワークショップ」の中でも、何かやりたい、進めたいという方のグループ向けのきっかけの手法や情報などについて知っていただける講座などの場を設けたいと思う。京都市全体の話であるが、右京区の京北について京北町時代の過疎対策が引き継がれ議論がされプランができてきている。それに準ずるように、中山間地ということで、北区の三学区、右京区、左京区の山間地域でも京北に遜色のないような施策をしていくというのが京都市のスタンスである。京北のように国や府の補助がなく京都市の単費になるので財政的な限界があるが、何かできないかということで議論を進めている。地域に密着して、山間地に住んでいただき、コーディネーターとして役割を果たすような支援体制が取れないかということも話されている。区役所としての希望は、60周年の事業をきっかけとした学区あるいは町内会など区民の集まりを継続していきたいと思っている。

先ほどのお話の中で、場面場面でカフェ活動が行われるという話については、今の区民提案支援事業では一般化するの難しいかも知れないが、紫野でカフェをやりたいという話もあるし、行政としても支援していきたい。また、時間中に使っていただくという縛りがあるが、本日、区民交流スペースを、税の執務室跡を利用して作った。そこでも、そのような活動をしていただく場となると思う。付け加えになるが、そこには、大谷大学の学園祭実行委

員会の学生から60周年を機に製作したモザイクアートを寄贈いただき飾っている。学生自身が区との関わりを着目するという状況も生まれてきた。60周年という中でできたのだと思う。

このプログラムについても、参加する方に進めていただく「北区民つながるプログラム」として作成した。来年度予算を整理していく中、なんとかこのプログラムが区民の皆様の間でみがき上げていただき、実現していきたい。市としては、特に人口減少、少子化が課題のキーワードになっている。人口が減っていることがさまざまな課題の原因になっている。楽しい形で取り組めたらと思う。

○市川座長

みなさん、他に何かありますか。

○事務局

頂戴した委員の皆さまのご意見をどのようにプログラムにさせるかということについては、市川座長、副座長と相談として、委員の皆さまに報告させていただきたい。

○市川座長

委員のみなさんの異議がないようなら、副座長・事務局と相談させていただき、素案をとりまとめさせていただきたい。それでは、議題2パブリックコメント・今後のスケジュールについて、事務局から説明をお願いします。

○事務局

<資料2, 3に基づき説明>

○委員

受付が1月4日からとなっているが、12月中に送付することは可能か。

○事務局

可能である。

○委員

集めるのは10通以上でもよいか。町内会長や各種団体の会長の集まる場で取れると思う。多い方がいいか。

○事務局

たくさんのご意見がいただければ大変ありがたい。おっしゃっていただければ、応募用紙をご用意させていただく。

○島田副座長

意見募集の質問項目で、問5「あなたと北区のまちをつなげる取組として、以下のようなものがあれば、『参加したい』『やってみたい』と思いますか。」について申し上げます。他府県から引越し、京都に住みながら商売をする人が増えている。例えば、東京の出版社で働いていた女性が一念発起して辞めて紫竹に住んで商売をしている。今回の質問事項に、項目として「お商売を始めたいか」「京都でスモールビジネスを立ち上げたいか。」というものを入れるのは、どうか。人口を増やすという話も関係してくるが、新しく流入してくる人のきっかけづくりのスタートアップをバックアップする質問を混ぜるとマーケティングや空き家対策にもつながると思う。

○事務局

相談して検討したい。

○事務局

その他として、現在、京都市では、京都市基本計画である「はばたけ未来へ！京プラン」の実現に向けて、「はばたけ未来へ！京プラン 後期実施計画骨子（平成28年度～32年度）」を取りまとめ、11月24日からパブリックコメントを実施している。委員の皆様にもぜひともご意見を頂戴したいと思う。よろしく願います。

○事務局

コミュニティラジオ開局に向けた動きについて報告させていただく。

- ・平成28年3月開局に向けて順調に進んでいる。
- ・11月総務省に免許申請が受理された。
- ・12月1日NPO法人が、大垣書店本店4階に事務所を構えた。
- ・色々なご支援をいただいたが、引き続きのご協力をお願いする。

○市川座長

それでは、議題は全て終わったので、進行を事務局に返す。委員の皆さん、御協力ありがとうございました。

○事務局

委員の皆様から有意義な御意見を賜ったことを感謝する。「北区民つながるプログラム」については、北区制60周年をきっかけとして、来年度からのまちづくりのバイブル・羅針盤として使っていきたいと思う。引き続き、貴重な御意見を頂戴したいと思っている。北区民まちづくり会議を終了する。

<以上>